

職人の心を忘れるな

鄭 宇龍 (中国)

来日して間もなく三年です。最初の一年間は東京の日本語学校で過ごし、その後、神戸大学入学をきっかけに、本格的な留学生生活を満喫しました。もちろん苦しいことがあり、楽しいこともいっぱいあり、僕をびっくりさせたことも少ないとは言えません。その中でも、一番感銘を受けたのは、日本の職人精神かもしれません。

特に日本の番組の中でその特徴がよく表れていました。百年も技を守り続ける京都の着物屋、時代とともに進んでいる浅草の食事屋、細部にわたって研究し抜いた提灯の職人など、数え切れないほどです。日本の番組では、飽きることなくそれらの職人を紹介することを通じて、日本の美しさと素晴らしさを外国人だけでなく、日本の若者にも伝えています。

ある在日韓国人作者が書いた本を読みましたが、韓国人の観光客が日本を訪ねて、最も驚くのが、やはり老舗の多さです。なぜかという、作者によると、韓国では職人は持っている店を子孫に受け継がせたいがらないそうです。自分自身が汗を流し、必死に頑張ったのであるから、その苦しさを後代に繰り返させたいがらないのです。できるだけ子孫にはお金を用意し、大学に入らせ、頭を使う仕事を探させるのでしょう。ですから老舗の数は僅かであり、二代以上その店を守ると、逆に他人にあざ笑われると言います。

その原因はいったいどこにあるのか探してみると、おそらく中華思想である儒家にたどりつきます。孔子が作り出した儒家は、もともと職人を見劣っているという意味の“君子不器”とさえ言い出しました。つまり、具体的な技を重視しないのです。あるインターネットサイトのコメントでは“極端に言えば、万卷の書を読み何もしない、なんて人が尊敬されます。これは現代にも残っています”という記述さえ見ました。

引き続いてその無名の作者は以下のように述べています：“これに対して、日本は武士支配が700年続いた国です。肉体を動かす仕事を蔑視するようなことは少なかったのです。だから職人がそれなりに認められました。”

もっともです。歴史から見ると、ほぼ同じ時期にポルトガル人から鉄砲の技術を手に入れた日本と中国は、重視する程度の違いによって、完全に異なった近代化の道へ踏み出しました。もちろん他の原因もあるのですが、技術に対する態度の差がさほど大きいのは、認めないといけません。

中国では、いくら天才的な職人であっても、社会的地位は想像もつかないほど低いです。たとえば、台北の故宮博物館へ行ってみると、数多くの宝物があります。しかし、ほぼ全部に職人の名前が宝に付いていないのです。簡単に言えば、名前を付ける資格がありません。言うまでもなく、肉体労働は極めて軽視されます。

日本の場合は違います。昔から何百年もの歴史のある洋食屋は神戸に何軒もあります。毎回神戸の北野異人館へ行くと、このような歴史のあるところに立ち寄り、ゆっくりお茶をいただき心地よい時を過ごします。時には店員さんと少しおしゃべりもし、その店の歴史を満喫することができます。店員さんはいつも自信満々で店を紹介してくれ、笑顔が溢れている様子でとても感心しました。

また、よくテレビと雑誌で見えるのですが、日本には“脱サラ”という言葉があります。結構多

くのサラリーマンが大手企業の仕事を辞め、三十代か四十代から農業や手工業を手掛け、自分なりの生活軌道に乗ります。中国人には考えられないのですが、公務員を辞めて実家へ戻り、竹編、陶器、和紙などの作業をやり始めた人もおります。あるいは給料が高かった漫画家が、人気のない田舎へ移住しに行き、自らの憧れの生活をしていることもあります。何の不自然さもないです。むしろ、隠された輝きを自ら見つけたのです。

よく言われるのですが、日本は細部から素晴らしい国です。日本に来て初めて知ったのですが、その原因は日本人の勉強熱心さにあります。日中間の論文を比べても一目瞭然ですが、中国の論文はなるべくテーマを広げます。私も日本へ来て最初にびっくりしたのが、指導教員が書いた論文の“小ささ”です。私は日中比較文学を専門として研究していましたが、先生は“最初から誰の作品、且つ何の時期の作品、どの研究方法かを決めたほうがいいじゃないですか”とおっしゃいました。そんなに細かくても大丈夫ですか、と私は戸惑いましたが、いろんな先行研究を読んだ上で、やはり先生の意見がいかに貴重なのか、ようやく理解しました。

しかし、最近日本の若者は職人の心を忘れてきたかのようです。コンビニでアルバイトをしていた時、ただ稼ぎのためにアルバイトをし、しばしば遅刻をし、シフトさえ忘れる日本の大学生を何人も見ました。そして店長に叱られると、すぐ仕事を辞める人もいます。

大学専門の選択もそうです。経営や、法律や、医学などすぐにお金になる専門が人気の一方、工学や大学院に入学する人数は減っています。神戸大学の状況はまさにそうです。授業をさぼったり、授業中に寝る大学生がこのレベルの大学で見ることができるなど信じられない驚きでした。日本の若者は、ある程度職人の心を忘れていきます。

いったい、職人の心とは何でしょうか。抹茶とカレーの例を挙げましょう。抹茶の期限は中国ですが、中国本土ではもう失われました。逆に日本人がそれをきちんと守ったのです。カレーもそうです。そもそもカレーという物を日本人の手で一変させ、インド人にも誇ることでできるカレーライスになりました。それは職人の心です。源流を問わず、力を尽くして、物事を最高レベルにすることです。それで、何年も続いていくのです。多くの職人技は、以心伝心だけで伝えることができます。理論がどれだけあっても、豊かな経験を生かさないとだめなのです。実践的なことをやらないといけません。

今年、神戸大学のバスツアーで、但馬を訪ねました。ある工場で、丹波焼の陶器を作ってみました。非常に貴重で、人生初めてのものづくりです。幼い時から両親に“勉強に専念して”と言われてきた私は、恥ずかしながら、洗い物さえあまりやることがないのです。陶器を作っていると、初めて自分の中に職人心を発見しました。工場の先生たちも丁寧に教えてくれ、ありがたいと思いました。そして先生に“この工場で働いてどのようにお感じですか”と伺いました。先生は“良かったです。”と答えました。給料も満足できるし、自分が好きなことに専念できるとは、一番幸せなことなのではないでしょうか。

伝統思想も関係しますが、日中の職人に対する態度には大きな差があります。私は儒家思想を完全に否定したくはないのですが、“君子不器”には新しい解釈が必要でしょう。なぜかという、すべての人が君子になるわけがないのです。職人の心とは、自分が好きな方向へ行く、ということです。もとより、個人のみならず、社会でも個人の価値を重視しなければいけないと思います。しかも、そのためにもっと働きやすい雰囲気を作れば、良いのではないのでしょうか。

職人の心とは、自分が好きなことをやること、技術に専念すること、勉強に熱心することです。日本の強さがそこにあると確信しています。何としても、職人の心を忘れるな。 (2,955文字)